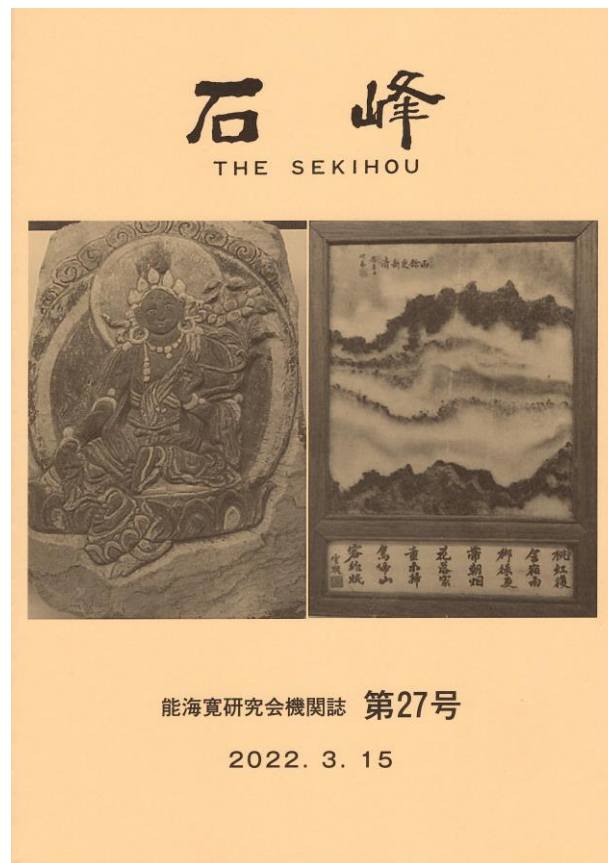


『石見瀉高嶋記』 (M28)

タイトル	「石見瀉高嶋記」(M28)
著者名	能海 寛
雑誌名	能海寛研究会機関誌『石峰』 ISSN 1883—4183
号	第 27 号
ページ	98—103
発行年	2022.3.15
E-mail	Sekihou@hazaway.com(能海寛研究会)



明治廿八年七月下旬

石見潟高嶋記

今年夏、この高嶋に遊び来て暫く滞在し、昼は書をよみ島巡り、海水浴、夜は漁火などがめ又朝には小供あつめ簡易小学のわざ教え、夕には法席をひらきて島人を教化す。皆純朴にしてよく言を聞く。

日の本の すべてはなくとも 君が民
安すく月日を 送る嶋人
ありがたや 月はいつも たらすなり
高嶋人も おなじながめを
石見潟 千浦に出る 漁火を
み己たしつくす 高嶋の人
石見潟 名も高嶋の 嶋かげに
磯うつなみに ころろくだきて
明治廿八年七月廿四日在島中

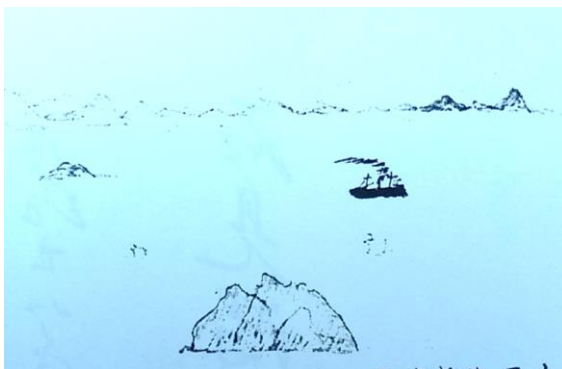
石州波佐天頂山石峰上人

しるす右高嶋記張合せの
中に入置く。

石見潟 名も高嶋の 嶋人は
地方ながめて 日を送る
うらうらに 夜な夜な出る 漁火を
見て夜をふかす 島人や
石見潟 あちらこちらを 見己たせば
どこへゆくやら 帆かけ舟

高嶋詩歌記 米山氏重矩

石陽の西に見てしを□□□□□□□□
行て是□人なしていへと□を□□□□
□嶋なれし特乃勸に志□りひ□□□□
事を願ふよしを窺ふに□ありて渡□□
と舟出をしに石見の海阿しきと□聞



天頂山石峰上人

如しふと国もなくす風も心にまりを此嶋へ
なん□きぬ誠に国をはなれ□□□□□
君の恵みは□といひこ□と□□□□
富も安く竈にきはひきり□□□□□
石見□□□□□し嶋に住人も
やすきぞ君はめくみならずや
岩尾ちひむいて松木胸つき浜にいと
うやうやしき社あり磯ら川なみ
白ゆふはけし粧ひをの清くしなり
明神と聞よみるたてまつる
佐々へ聞名も高嶋の
神な□はかけてぞ頼む
波乃志らゆふ

一日友人懐一卷而投梧右披而読之
米山氏重矩丈之往干高嶋而所
詠之知歌也乃吟之則頭風頓痊
齒牙亦馥矣因摘倭什之末字
使秃毫走楮国矣且又賦川八
一律叨述鄙情云尔

石陽山人

一嶋波悪遠塵世三間第屋海岩際漁翁
撃壤体将胖歌謡自以謝客惠

高嶋

傳聞高嶋境離国海雲深逆浪積花色
閑鳴得水心夏涼欠蝸虫冬□聽鯨音
比屋如無非常宥配所陰
浪たつ□石見海に□はるりたる
嶋ありそ□を高嶋といふこま
志きのうみは母遠から明とのや
かかれは秋くる□も廻をや明むる
を□□にまして網手□□の嶋
母おもひかく□□は□□
志りハ□礼と此国□□□なれされさる
みちはむりしよりよく志里て
□の書の令を法□□みさ□□わ
高□□□きこり礼□る事
□□せ□□ま□□職に□□□

侍が乃志方□わさりて□のさ多を
見むを□つし□れてし
元録乙亥のとし春の風□とり多
□さまり□□なみも志つかなる
日舟出してみるに人のこころ□□□
にし字志りも□さるをうやまひ
いとけな花をめぐむ幸よ□
つねにかわると□し女は□□
ありてらと在人にみみすがすが
国をは□れ海を□□さる所も
□日の本の土なればその風□□□
□の□もよくかよひ聞□る□所
豊秋津州をうみ□□しかくし免
神の山つしのいさ□し母しら□
□つととふとし此ことを聞□さふ
家人家人からのふみをつく里
あるはやまと歌を詠し□
これを此ふやつのれも又いささか
趣を志るしてみてもし□
言葉を□□□にいく里

元易

石見瀉よ明る波さえ
高嶋や□□て母人乃
いく代□むらん
なみ風もあり□石見の
嶋にささり堂りはぬ人の
みちはありた里

源逝

屬日米山丈蒙官命渡り干高嶋
遍巡見民之風俗之次吟哦倭歌形
容風物岡親若採摘其末字賦
唐詩一章以責予モ復綴之乃木
顧リミ不戈走筆

朝夕陰晴半有無
杳然海面覆盤盂
猶増一葉凌浪志
宥盡詩篇孤絶圖

又

蒙命欲相攸 炯波掉扁舟
鷗聲無晝夜 日色異春秋

獨對島中月 猶吟巖下流
蛮言初響耳 自訝外吾洲
用和歌之惠字 快道
眼迷風煙一快晴
万丈銀浪接天際
欲宥風物渡海時
多少漁父都懷惠
一日米山氏重矩雅丈既有官命而涉高嶋相於
它攸居民鮮少而風俗淳朴也可謂擊壤之
民乎哉古人所謂無罪見配處之月是實歌
客騷人所可卜居也於是□人此処心樂焉神怡思
身隋焉仍謾馳禿毫賦一律以附干楮尾
村上氏竊吹

石城西海煙波裡
高嶋漁民自出塵
夕飯第舍子妻親
北溟遙送征帆浪
南浦近望三角津
潮味得甘久居客
傳言五世及茲身

海渚有里也名謂於高嶋也八口之家
列屋然雖有令無見吏故雖有里人
少知焉乎於是吏行而欲正
於風欲民懾然自語堯時之人矣
吏感之謠歌歸而報大臣又為之
有詩賦予復述其趣云尔

不知高嶋地 仔細故人傳
童子居芽屋 漁翁売市鄺
相親吏欲釣 乍聞却疑仙
処□多恩澤 祝君猶万年
儀 禮

米氏矩公行理高嶋之日有籥笠之
吟乃以安惠之字安之季句称揚
君澤之於釣徒也予披之見之不耐
默止賦野語一絶充一笑云尔

臥竜翁賢式

嶋離塵累自蟬蛻
牛熟竿綸經幾歲
蓬戸幽棲容膝安

象傷零深需蒙仁恵

象嶋賦一津

七 嶋開未有

五 嶋乗白蘋詣文

三 嶋行諳見桃源秋墨

一 嶋公龜山三十里境廟作

二 嶋雖至小四高陳民真新

四 嶋歩適逢無懷天日

六 嶋拗黄菊供日

八 嶋得君思

右以拙什□入□大名□之□□辱
ふ棄櫛□各□示□作既□書
楮□□□□乃似瓦石□□□
金玉螢光□□月光宁夫予独
樂石如□彼地□永慰寂察即
□焉

石陽城主

松平周防守家来

米山理兵衛

重矩□

元録八乙亥歳林鐘廿一焉

高嶋滞在中

石峰山人

右原本ハ巻軸にして重矩氏の直筆

至て能書なり只近年々山りて乱雑で

或ハ前後し或ハ脱失せるケ所ある如

高島表屋島内多十郎氏方所蔵

予本月廿一日本島ニ学遊本日写之者也

明治二十八年七月廿三日書写之

高嶋滞在中 石峰上人

右原本は巻軸にして重矩氏直筆にて能書なり。只

近年に至り手て乱雑也。或は前後し、或は脱失せ

るが所ある如く、高島表屋島内多十郎氏方所蔵。

予本月廿一日、本島に漫遊。本日写之吉也。

明治二十八年七月十三日、波佐天頂山を發足。

三隅正樂寺安居法会演説に行き、十八日、日中に

至る。十九日、岩本氏同道、古湊に出て、角の部

屋にて高嶋渡りを問合せ、廿日、荷物（書籍、米三升、カヤ、毛トンボ）及び弁当、口菜を下女に持たせ、午後六時發、古湊に一宿。酒2升みやげに持行。

廿一日 朝七時、出舟十一時頃高嶋へ着。表屋島内多十郎坐式に宅す。二階造りにて、上間六畳、下の間同上、ウシロ4畳半、二間に庭あり。高き地にありて、眼下に海及び沖本地を見下す。家内十一人一老夫婦八十より九十也。

廿二日 午後、子供を集め体操を教ゆ、又島内を散歩す。戸数七軒。皆一か所。表屋の外は皆小屋也。一昨年、大火のとき表屋の外、皆火事の為に消失。其年、小舎掛の処又々有名の大風皆倒し官より本地移住を勧められ後、又帰りて、この島を開く故に大に困難特に、一昨年、及び昨年は大干ばつ。畑畠物熟せず風の為に大老古樹但し、幼も皆枯死するに至る。島内ハマヤバの木、亀ヒバシ、ウスビター、タチコード、コーゾ、桑、シヤカキ等あり、養蚕もなせり。二、三枚しはきたつるに足るの教ありと。畑畠多くして大豆、サツマ芋、タバコ、キュウリ、ムギ、キビ、アワ、殆ど何にてもよく出来。島の海辺は悉く皆、大岩、巨石、灣口、更になり。僅かに舟をつけに人を上げ其舟は多の所十町も脇へ回し、不便の石岩の間に上げ置く。島地に四艘の小舟漁舟あり、薪（タキギ）あり、又水も二ヶ所あり。一ヶ所は常に出る。充分。上は赤土多し深し、又宮に参詣す。一間四角位也。今日は海水浴せず。昨日、一回入海せり。

廿三日 昨日は降霧両陸地点見えず、本日は、晴天にはあらざるも天気にて沖地も見へ、今日は沖を蒸気船通り、又高嶋詩歌記を出され之を写し、又夜に入りては古事談を老翁より聞れり云う。当島の神は明神にて元出羽村の神体三体□せ求むるに、この島にあり、其又失す。やはりここにあり由て、二体を本島に安置し、一体を出羽に祭る。

（子供其三体を見出したり云う）殆んど千年も前のこと也と云う。又寝物語に云う。三隅入道様の女を益田越中守様より所望になり、之を嫌い三隅様落城。この高島に七人の家内にて逃げ隠れたまう。越中様この島を訪ね、的とか云う地にて見出

し、遂に血戦。七人共打ち死せり。
今頃畑を開くとて打死に指の骨など出でり。是れ夫れにはあらずやとのこと。木都賀村禪寺の和尚外二人来島して、其先祖を調べに来て、此話を聞きて満足して帰り、近年事なりと。

入浴せり。鮮魚結構也。毎度、小供体操及び晩、説教せり。

廿四日 朝、蒸気船通航せり。昨夜の又夜釣りと称する漁火は非常のものを数万軒の町屋数十町の河辺に相灯せん如く、西江崎より（広島より八里）、東は濱田（高島より八里）を過ぎ、温泉津に至るまでの間、数十里間、或は津ノ都、郷津辺、或は、長濱、古市辺。或は市津辺、小浜辺一列に火を点し、其立派なること大陸のものより夢にも知るなり。得ざる好景也。金に数万灯一列也。本日は又午后風雨強し。只蚊やの内において、高嶋の歌数首よみなどせり）

病人ありて舟大浜行。此夜、大嵐にて浪高くあり。風雨、畑物大害をうく。瓦も一、二枚飛ぶ。戸、障子大混雑也。晩、説教。蚊用のかわりより、おらず。老父の少壯、一時は三戸十人に足らぬことあり。

廿五日 午前、愚考せり。午後、休み。且つ、島の話を書く。島内七戸四十六人なり。表屋十一人。中屋六人。岩治方七人。コマヤ四人。隣七人。与市方四人。一寸入海浪高く恐にしや。昨日より語々と国郡名、年号、イロハ、数字など教す。本日は近日になき晴天。弥畝山、大佐山、柏原山の頂少し、漁山など見ることを得たり。夜、説教す。快晴なり。昨夜の風、作物大害。

廿六日 午前、教も月九日など教ゆ。一昨日、出舟の舟、大浜より帰着。大浜部屋為十より、予の話を書き特に丁寧になし。本日、日中法会を開く。千疊敷の断崖絶壁、仏ヶ石など見物。永井、姫おとし、またうちなど見物し帰る。浪山て高し。蒸気下る。和船数十双下る。韋糧希夫人を語る。了解文を書き与こと。又習字本など。晩、説教。午後、降雨。夜至て悪し。雨多し。毎日、さかな海ぞうめん。誠に結構なり。至てコーゼンの木を養う。肥たり。口に無上甚深の法を克き。其即口に不浄

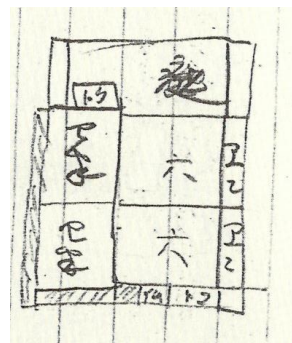
の魚肉を喰う。誠にざんぎの至りなり。如何考へ心得れば可なりや。智者の意見聞かまぼし。

廿七日 今日、昨夜より非常に強風雨。渡島以来最も悪しき日よりにして少しも晴天ならず。子供には教えず。晩、説教す。建夜を勤む。嵐もこの内より早起きも浪あり。浜田様、古田兵庫様、浜田の御城をお立ちなされ周防様よりよりも前なり。其時より、この島を可愛がり珠り。古記録を土田村の某、近頃帰りたり。又刀磨きが騙し刀を取り替りしと。

廿八日 この日、精進を命じ、朝事を勤む。法話す。海ゾウメンを多く食す。誠に有難たし。御和讃など多く書き与へ海水浴を充分せり。子供を岩上にて育す。晩など種々天文器械などの話をなす。

廿九日 朝、小供に教ゆ。風強し。天気分なり。午後、入浴充分あびたり。午後三時近より、漁舟を浮かべて島を一周す。奇岩、霊屈至る所、皆尔々ざる話し漁人は魚を釣る。浪高く荒れる時あり。ある時は岩屈の上にて海ソウメンを採取し、或は浮かび遊ぶ。□快なり。少し晩、説教す。

三十日 朝、荷支度致し、子供には体操をいとま乞いに教え、大に上達のきびあり。又五十音、九九など大分習い得たり。九時頃、乗船浪高くして舟上げ場に漕ぎつけ夫より帆を巻き大浪を凌ぎて、十一時頃無難に古湊角の部屋へ着き、遂に止められて宿、説教す。入浴せり。



「手帳記録」より

明治廿八年七月十九日志仰本日、高島に行んと欲して、古湊に至り訪合せ、明日便船のあることを聞き、正楽寺岩本氏同道。再び正楽寺へかえり、午後、三隅家菩提所正楽寺へ又此同道参り古縁起を問い、毛利の為に亡され、焼失立ててかへすとのこと。由て再び、七洞伽藍に立てたりと云う。本尊薬師古体なり。又地乍尊の六尺斗りの最古像あり。誠によしる三隅家の古墓あり。奥ノ院あり。其中小五色鏡大阪に出し近頃うる、百円せりと。

其札礼中観音様の上にみくじ箱あり、取テつり出しとするに第六十八番に経文書を開き見るに、士にて願望あり、急にすへからず。漸々には勝利す。急にすべからず。后には大によしと云しむ。再び見るべし。又岩本氏引かるるに第廿八番凶出家ならば寺持に難あり。いれとしせはよしと云しむ。大に兩人共よりあひ感心せり。

思ひ出せは先年伊豆大島に渡らんとする時、出船あるとする三〇まである船中の人来りミクヂを示し深山〇学人〇〇の句を予偶然に得、大に喜ひ今又高嶋に渡らんとして見合せ中、此寺に参り此ことあり真に偶妙々なり。

七月廿日、午前世界語話せり。午後、下婢に荷をもたして古湊に遣す。帰りて報するに明朝にあらずは出船なきこと。由て又、午後ねたり、おきたり。降雨強し。干時、午後五時頃、一人来こと。予は高島のものなり。今夕、又は、明朝出船すと由て、雨を浸して七時半出発。日没の後、古湊角の部屋に至り種々語して此家にねる。島のもの大ねごとにはこまる。朝おきて七時頃、出船、船頭七、八名無事。十一時頃着島せり。

七月廿一日、高島へ十時過着。中飯は弁当さかな結構さしみ及煮汁。后、島人へ酒二升を与へ子供に菓子を五個宛与ふ。

ジカタと島とに分つ。濱ヤバノ木多し。ドー(木名ヤマモモの様なき)、ウエビター(木名)、タチコー(実なる)、亀ヒバシ(実なる)、ジャカキ(大に形ち〇ふ)、コーゾ、桑、少々。此島頂上四つあり、一、家の上最高三角木あり。(以第廿七号廿七年七

月陸軍測量局)二、畠頂低し、三、〇山、四、離れ山、松皆枯、一昨年、火事全焼。其年又大風の為に皆倒る。

キビ、サツマ芋、キュウリ、カボチャ、ムギ、大豆、アワ。晩、説教せり。

廿二日、午前、〇、午後、小供あつめ体操、軍歌。晩、説教及反戦争話す。

廿三日、午前、高嶋詩歌写せり。



美濃郡土田村字高島



【高島 七名所 七寄】

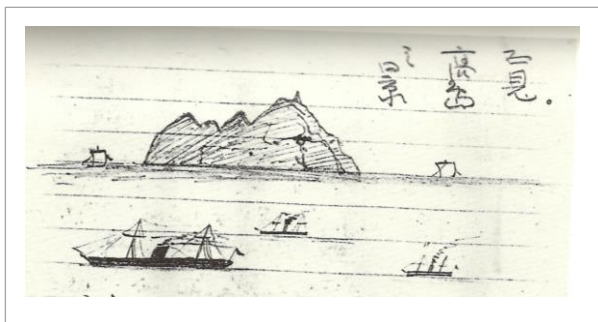
- ① へソノ下タ ② ほとけ岩 ③ 千畳シキ
④ 姫落し ⑤ ヌウチノセ ⑥ 明神 ⑦ ?

【高島の七驚】

- ① 全島周囲断崖絶壁港湾濱皆無漁舟碇泊所なきこと。
② 家屋廣且ツ良ニテ濱浦的臭気ナキコト。
③ 漁業三分ニシテ農業七分ナルコト。
④ 元禄時代米山氏高嶋傳歌記存傳セシコト。
⑤ 人情風俗言語殆ンド大差ナキコト。
⑥ 時々海馬上陸ノ日ブリリヲナスコト。
⑦ 貧富生活言語風俗ハ本土ト大差ナキニ地方(ジカタ)ノ人々ヨリ「島ノ者 島ノ者」トノヒンセキ軽ベツセラルルコト。

【雑驚七寄】

- ① 水場へ二丁、舟置キ場へ八丁、神社へ五丁、海へ一丁、へ遠キコト。
- ② きゅうり、ナス、其他野サイ、イモ、キビ、アワ、ボーフラ、ムギ、別シテ多作り。ヨク出来ルコト。
- ③ 桑、楮、アリテ養蚕ヲナシ多キハ原低一牧モ飼ウモノアルコト。
- ④ ハマヤバノ木ウスビター、タチコードー、ホノ木リ
大松風ニカレシヤカキノ葉変成木ノコト。
- ⑤ 寄島居リ又一度猪海ヲ渡リ島に來リ島人手モノヲモチオヒタルコトアリ又子ネズミ多キコトモアリヘビナドゴミノ大流レニ乗り島ニ渡着スルコト。
- ⑥ 材木ナド家具ナド流レテ島人ヒロウコトアルコト。
- ⑦ 陸地大モズノトキ水ノミ場ノ上ヲ流レテ島ノ方ヘ向テ流レ來キタルコト一キワタチテ見ヘルコト。



【解説】

この「石見潟高嶋記」は、明治28年7月に益田市沖の離島、高島へ渡り、小学校教育がまだ手の届かない離島に渡り、へき地教育の先駆けを行った記録でもある。

いわば、今日の生涯教育活動と民俗総合調査そのものであった。島民との交流や歴史資料の掘り起こしと伝承。民俗にも関心を示し、聞き取り調査を行い、家屋の間取りなども記録して、現代に伝えている。

詩歌や写真に代わるスケッチも多く残している。スケッチからも当時の帆船や汽船の様子が忍ばれるものである。

記録では、高島へ渡るため三隅町の古湊から渡船している。『石見潟高嶋記』では、島民へ酒2升を手土産としている。別の「手帳」の記録によると子供には、菓子5個宛土産にしたことが記されている。こういったことから、『石見潟高嶋記』に別載の「手帳」記録も一括掲載をした。

明治25年の伊豆七島巡りを行った『東京南島紀行』に続く船旅の紀行記録である。(隅田記)



益田市沖の高島全景